大陸に移住したが夫を亡くすなどし、中国人と再婚して国共内戦のため台湾へ移住した場合である。

本発表の前提として台湾社会における日本そのものや日本語のもつ意味はどのようなものだろうか。戦後の台湾社会では省籍矛盾と呼ばれる日本統治期から台湾に暮らす本省人（台湾語を重視し、台湾独立を望む）と戦後中国から移住した外省人（北京語を重視し、台湾は中国の一部分と考える）、との間におけるコンフリクトが存在し、台湾の長老教会は明確に本省人のための教派で台湾語重視、台湾独立という姿勢をとっている。そうした教派にとっては日本語を重視し親日的な態度をとることは、反中の態度を明示することを意味している。こうした戦後台湾の文脈で「日本」という場を求める一定数の台湾人が存在する。そうした彼らの「日本語欲求」を満たす場の一つに国際日本語教会や玉蘭荘がなっているのである。台湾人参加者には日本統治期に日本語のみで暮らし、戦後、北京語、台湾語、英語を学んだため、母語というものがいない人や、台湾語の方が礼拝にふさわしい言語だと感じ日本語教会に参加するという人等、多様な背景を持つ人々が集まっている。

日本人妻にとつての日本とキリスト教に関しては、それまでの過酷な生活のため宗教的癒しの必要性があり、また高齢者である彼女たちにとっては死や健康の問題が深刻であり、キリスト教がその欲求を満たすようなスピリチュアル・ケアを行っている。

以上の議論をふまえると本発表の事例は単にエスニック・チャーチという風には理解できない。そこには日本人と台湾人の

「日本語族」という複数の民族集団が結合することで、場が形成されている。寺田喜朗は台湾における日系新宗教を疑似的エスニック・チャーチとして分析した（『旧植民地における日系新宗教の受容——台湾生長の家のモノグラフ』ハーベスト社、二〇〇九）が、本発表の事例においては台湾人参加者についてあてはまるのであつて、日本人妻にはあてはまらない。彼女たちにとつて日本語の集まりは、「ノスタルジア（引き裂かれた過去への郷愁）」としての故郷「日本」を提供してくれる場であつて、エスニック・チャーチそのものである。それでいて日本人妻だけで場が成立しているのではない。このことから、台湾の日本語教会はエスニック・チャーチと疑似的エスニック・チャーチの複合的エスニック・チャーチとして位置づけることができるだろう。

在日ムスリムの少女たちのエスニシティと複数の故郷

川崎のぞみ

本発表の目的は、日本においてムスリムであることが所与の環境に生まれた第二世代の女性の信仰が、家族、社会環境、父方母国との繋がりの中でどのように形成されてきたかを考察することである。在日ムスリムに関する研究は、主に外国人労働者や改宗した日本人女性の適応についてなされたものであり、第二世代の詳細な研究はまだ非常に少ない。

ここで取り上げるのは、北関東に在住する二十代前半の女性の語りである。バブル期に来日したパキスタン人労働者と改宗日本人女性の間に生まれた子どもという在日ムスリムの一つの

典型的な家庭において、パキスタンと日本のハーフの子でありムスリムの子であった彼女の両国の往還の経験は以下の三つの時期に分けることができる。

第一に中学生までの時期である。彼女は、小学校時代は短期往還を繰り返して、中学時代はほぼすべてをパキスタンで過ごし、この時期は日本ではスカーフ等をしていなかったこともあり、いずれの国においてもそこに順応さえすればよく、むしろ異父兄弟や弟と異なり父の第一子として一人だけパキスタンでの生活を余儀なくされたこと、教育方針をめぐる両親の衝突など、複雑な国際結婚の家庭の問題が彼女の葛藤の中心であった。

第二は日本で県立女子高に進学した高校時代である。彼女は父の言いつけどおりスカーフ等を着用して登校したが、周囲と違い「普通の日本人」でもなければパキスタンでもないことに強い葛藤を感じ、さらに父が求めるムスリムの女性としての装いやふるまいが彼女の葛藤をより複雑にした。溶け込みたいと思いつつも自ら差異を表明しなければならぬことで、非常に恥ずかしく嫌な思いをしたという。

第三は、高校卒業後、やはり父の言いつけでパキスタンの寄宿制イスラーム学校に進学した時期から現在までである。そこで彼女は、日本人でもパキスタン人でもないという悩みに対し、「神様が与えたことの方が大事だ」という友人の言から、葛藤の原因はその根底にあるべき自らの信仰の不足であったと考えられるようになる。それまでの周囲との相違という「対人間」の視点から「対神様」の視点を得ることで、どちらでもないという

葛藤を受容することができるようになったというのである。

以上の語りからは、父の故郷と、彼女が生きていく場所と考えている日本のそれぞれの価値規範の葛藤が見て取れる。日本人の妻の連れ子や息子よりも、娘である彼女の上に父の故郷の規範を再現することは、父方母国に対し、父の名譽を表すことになるのである。こうした名譽規範と、日本の学校で求められる同質性との間で、彼女は常に「心のリセット」を行わなければならない「分裂状態」にあった。第二世代に特有のコンテクストへの父親の無理解と葛藤という移民の世代間のギャップは、ムスリム移民の場合、特に可視的である女性の衣服の実践において顕在化しやすいといえよう。

また、彼女の在日ムスリムとしての経験は、必ずしもイスラームの信仰とは結びついていない。家族以外のムスリムとの日常的な接触がなかった彼女にとっては、イスラーム的な価値観や実践は所与であったも、「信仰」はそうではなく、むしろ気づかれるものであった。イスラーム的視点を獲得し、父からもたらされていたものを自らのコンテクストに沿って再解釈することで、「ポーン・ムスリムでありダブルである」と肯定的に捉え返し、二つの故郷を彼女なりに受容可能な形で統合しようとしているのである。

彼女は自分より年下の少女たちにはこうした葛藤が見られないうという。第二世代のムスリムが増加し、彼ら／彼女らのための場が広がる中で、第二世代のムスリム・アイデンティティが今後、どのような展開を見せるのか、注視していきたいと考えている。